

淀城懐古（榛葉竹庭）

樓臺 疇昔 清川に 枕み

寵妾 粧を 凝らして 玳筵に 坐す

逝水 回らず 春夢 盡き

庭花 猶 紅鉛を 結ぶ 有り

樓臺疇昔枕清川 寵妾凝粧坐玳筵
逝水不回春夢盡 庭花猶有結紅鉛

解説 天正十一年四月、柴田勝家の居城北庄きたのしょうは秀吉の攻撃の前に空しく潰え去り、勝家と淀君の母・お市は猛火に包まれた天守閣の中に消えて行つた。然し、ちやちやは城を脱出して秀吉の許に身を寄せ、天正十七年に側室となった。その後秀吉の子鶴松を生み、山城国の淀城を与えられて淀殿と呼ばれた。時に年二十三であつた。

語釈 ※樓臺 高い建物。楼台。※疇昔 むかし。※玳筵 鼈甲べつこうで飾つたむしろ。豪華な宴席で用いられた。※逝水 流れ去る川水。行く水。ひとたび去つて二度とかえらないことや人の命にたとえていう。

※紅鉛 べにとおしろい。

通釈 その昔、楼台は清川に臨んで聳え立ち、秀吉の寵を一身に集めた淀君は、装いをこらして美しい宴席に坐していたと云う。所で、当年の栄華も逝く水の如く、又、春の夢にも似て、果無く消え去ってしまったが、今でも庭花だけはべにやおしろいを結んで咲き誇っている。